

放射線防護マニュアル ―第3版― 安全・安心な放射線診断・治療を求めて

草間朋子, 小野孝二 著



本書は、医療領域における放射線被曝の概要、様々な放射線検査に関する留意事項、放射線診療従事者に最低限知っておいていただきたい事項などをまとめた本である。

東京電力(株)福島第一原子力発電所事故以降、放射線診療の現場では、

診療を受ける(実際に放射線を照射される立場の)患者の放射線に関する関心が一気に高まった。被曝に対する不安・健康への影響など、高等な質問を受けることも度々ある。また、患者もかなり勉強されているので、対応するこちらも生半可な知識では到底太刀打ちできないといったケースもまれではない。このような現状を背景に、本書は患者対応に必要な知識と最新情報を盛り込んで改訂されたもので、この第3版は、草間朋子・小野孝二両氏の共著となっている。放射線管理に携わる者だけでなく、放射線診療の現場で患者と向き合っている医師・看護師・放射線技師の方にお勧めしたい1冊である。

本書を手にした時の第一印象は“読みやすそう!”であった。A5判・184頁で手ごろなサイズとなっており、2色刷りで読みやすく理解しやすいレイアウトなのも嬉しい。

内容は31の章と解説からなり、1~3章では放射線被曝と放射線防護について、「正当化」・「防護の最適化」、特に「医療被曝に対しては上限が設定されていない」などを分かりやすく説明してある。4

~24章では「CT検査」「PET検査」「X線検査」「インビボ核医学検査」「放射線治療」「女性に対する検査」「乳幼児に対する検査」といった放射線診療の幅広い様々なケースごとの内容を網羅しており、被曝線量や健康影響・診療に関する注意事項などが簡潔に記述されている。検査によっては被曝低減のアドバイスや副作用についての説明もある。25章からは、放射線業務従事者が知っておくべき事項が記述しており、放射線管理者が教育・訓練のときに参考にするのにもよいだろう。具体的な臓器の被曝線量や数値は表を使って分かりやすく工夫されている。また、専門用語については参照頁が紹介されていて後半の解説へと導く。解説は専門用語を分かりやすく説明してある。最後の頁に著者らが共同開発した「CT撮影における被曝線量を評価するwebシステム:WAZA-ARI」についても紹介されている。

しいて難点を挙げれば、標識についての説明頁が2色刷りであるのは残念な印象を禁じえない。

施設により、使用している装置が違っていたり、検査内容の詳細部分が違っていたりと、患者の被曝線量は多少違っているであろう。しかし、できる限り少ない放射線量で最大の診療上の効果を得るための努力を惜しんではならない点(ALARAの原則)はどの施設にも共通するところである。安全・安心な放射線診療を提供するために、放射線医療従事者は被曝線量の低減に常に努力しなければならないし、患者の不安や質問に適切かつ的確に答えられることができるようにしておく必要がある。その対応は、施設内で、地域で、全国で、標準化するべきだと痛感している。是非、本書を参考にさせていただきたいと考える。

(奥野浩二 長崎大学病院医療技術部)

(ISBN978-4-7849-4155-1, A5判184頁, 定価本体3,000円, 日本医事新報社, ☎03-3292-1557, 2013年)